

# フィロデモス『詩論』第五巻とペリパトス派の詩学(1)

北 野 雅 弘

## I 序

一七五二年に大量のパピュロスがヘルクラネウム遺跡の、いわゆる「パピュロスの家」から発見された。その解読が失われた多くの偉大な文学作品の再発見につながるのではないかという期待に反して、パピュロスのほとんどは、紀元前一世紀に活動したガダラ生まれのエピクロス派の哲学者フィロデモスの著作であった。このことは「パピュロスの家」がフィロデモスの私的な図書館だったことを示唆している<sup>1</sup>。当初の期待に比して失望に終わったこのパピュロスの解読は、しかしながら、古代の詩学のあり方に関心を持つものにとっては大きな意味を持っていた。

古典古代の詩論・文学論からは、われわれにはかなりの議論が残されている。アリストテレスの『詩学』は、おそらくは喜劇を扱ったと思われる第二巻<sup>2</sup>が亡失したとはいえ、その重要性は議論の必要もないし、プラトンも、プラトン以前の哲学者・詩人も、詩についてかなりの著述を残している。しかしながら、アリストテレス以後のギリシアの詩学に関してはわれわれの知識は微々たるものである。ヘレニズムからローマ時代初期にわたる時期に書かれた数多くの詩論はほとんど失われているからである。われわれはただ弁論術に関する多数の著作（そこには当然のことながら文体論が含まれる）とホラティウスの『詩論』から、当時のギリシアの文学論を類推することができるだけである。

ホラティウスの『詩論』は、すでにポルフュリオによって、彼の独自の考察ではなく、ギリシアの詩学、特にネオプトレモスの著作を下敷きにしたものであると説明されていた<sup>3</sup>。しかし、特にホラティウス自身が、*nec verbo verbum curabis reddere fidus interpres, nec desilies imitator in artum* と忠告している通り、彼の『詩論』がどこまでネオプトレモスの原典に忠実なのかという点に関しては、推測の域を超えることはできないのである。

フィロデモスの『詩論』が、断片的とはいえさまざまな形で刊行されて以来多くの人々の関心をひくことになったのは、フィロデモス自身の議論の重要性への注目というよりは、むしろアリストテレス以後の詩学の失われた環を回復するという意味においてである。そこにはフィロデモス自身の議論の方法が大きく寄与している。彼は積極的に自己の詩論を展開するのではなく、それまでの詩学上の著作を論駁することによって自らの立場を確立するというスタイルをとっているのである。また、彼の批判対象にはアリストテレスの『詩人論』や『詩学』第二巻があり、そこにはカタルシス論が含まれていると考えられるだけに、アリストテレス『詩学』の研究者にとってもフィロデモスの『詩論』は重要な研究対象になっている<sup>4</sup>。

論敵の議論を攻撃する際にフィロデモスには二つの特徴が認められることが、彼の他の著作から確認できる<sup>5</sup>。第一に、フィロデモスは相手の文章を正確に引用している。つまり、彼が論敵の意見として語っていることがらは、そのまま相手の著作から写された文章である。第二に、彼は論敵の意見を引用するにあたって、その本来の文脈には全く配慮しない。したがって、われわれには、さ

まざまな著作の断片が文脈を無視した形で残されることになる。

さて、ヘルクラネウムで発見された『詩論』パピュロスには全部で十七存在するが<sup>6</sup>、そのなかで最も活発な議論の対象となったのが、「フィロデモスの詩論第五卷」という表題と共に残されている *P. Herc.* 1425 である。フィロデモスの『詩論』をめぐる議論の多くが、このパピュロスの、特に前半部分に関わるものだった。

このパピュロスが特に多くの議論を引き起こしたのはいくつかの理由がある。第一に、それは十七のパピュロスの中でもっとも保存状態が良い。我々には二つの断片と、三六のコラムが残されており、『詩論』第五卷の半分近くが保存されていると考えられる<sup>7</sup>。第二に、その前半部分(コラム XIII まで)で述べられている論敵の見解は、ホラティウスの『詩論』と驚くべき類似を示しており、ホラティウスの依拠した原典か、あるいはそれと同じ流派に属する議論がこの中に含まれると考えられるのである。したがって、若干の例外<sup>8</sup>を除いて、このパピュロスへの関心もまた、フィロデモスの立場そのものというよりもむしろその論敵、とくにそれとホラティウス『詩論』との関係への関心であった。

*P. Herc.* 1425 には二種類の写しが作られている。それらは、保存状態の良くない原写本を文字通り忠実に写そうと試みたもので、編者による補足は含まれていない<sup>9</sup>。それらを基にして、また、コラム XXV 以下に関しては同じ原典からの第二の写本である *P. Herc.* 1538 とも比較しつつ、最初に *P. Herc.* 1425 のできる限り完全な編集を試みたのがイェンゼンであり、彼の著作はそれ以後の議論の出発点になっている<sup>10</sup>。

## II 最初の論敵(断片 I ~ コラム IX)

### 1 詩の快と益

パピュロスは次のように始まる。

断片 I 1~15

「どちらも悪徳の生活を…。また、哲学者の多く、特にもっとも偉大な哲学者たちも同様に、彼が述べたような教育によって教えるわけではない。また弁論家たちも、それに類した教育を何一つとして約束したりはしない。しかし彼が一般論として詩人は自分自身のであれ他の人物のどれどのような証明も用いないと言うとき、…」

この断片は『詩論』五巻の冒頭ではなく、議論の途中であり、フィロデモスがそこまでいくつかの論敵を相手にしてきたことは、既に多くの指摘がある。議論は今、詩の教育的効果に関わっている。フィロデモスの論敵が詩の教育的効果を主張するのに対し、フィロデモスは、おそらくはホメロスの二つの叙事詩を例に挙げて、相手の主張するような教育、それは美徳の生活を描写することによって美徳を教えるようなものだと考えられるが、そうした範例による教育は、詩の中で現実には行われておらず、哲学や弁論においてもなされていないと反論する。ホメロスが示すのはむしろ悪徳の生活である。

*P. Herc.* 1425 の前半の論敵がペリパトス派に属するのか、それともアカデメイアに属するのかについては、さまざまな議論がなされてきたが、詩が範例によって美徳を提示するというこの見解は、特にアリストテレス的だとは考えられない。確かにアリストテレスも、詩および模倣全般の学習的意義を強調している<sup>11</sup>が、それは、美徳のモデルを示すことによって美徳を教えるという種類の学習ではない。アリストテレスが考えているのは、詩的模倣が、「必然的・蓋然的」に筋を構成すること



によって、ある種の「普遍」を伝えるということであった。道徳的規範としての詩はむしろプラトン<sup>12</sup>に認められる考えである。

16～25は読みとれない<sup>13</sup>。

#### 断片 I 26～断片 II 2

「……少なからぬ弁論が教育的である。それはちょうど説得、称賛、慰め、忠告の弁論が、本来の証明という課題を担っていないと同様である。また、詩人は現実だけを提示すべきである<sup>14</sup>…と彼が言うとき」

ここで論敵は詩人の描写対象は現実(τὰ πράγματα)に限られるべきだと主張している。後に見るように、コラムVIIIまでの文脈では、τὰ πράγματα は単に「出来事」ではなく、実際に起きた事件を意味している。

次の部分はこの論敵が誰なのかを示唆しているとして、イェンゼンが後に特に重視した個所である。しかし、断片IIはきわめて保存状態が悪く、校訂は想像力を駆使したものにならざるをえない。イェンゼンの読み自体も最初は異なっていた。われわれはまず彼の最初の読みを示す。

#### 断片 II 3～23

「確かにホメロスは現実を観察した。だがそれが教育のためかどうかは疑わしいと思う。したがって、ホメロスが教育的だとすると適切になると彼(論敵)が主張することもまた疑わしいのである。しかし、他の詩人たちについて、それはわれわれがすでに(ホメロスに)よく似ていると述べた詩人たちなのだが、彼らもまた(教育的に)違いないと語るとき、他の詩人たち、特にヘラクレイデスが、ホメロスのやり方で進んでゆくと彼は解しているのである。我々が述べた通り、ヘラクレイデスは…(四行欠如)…、我々が彼らの理論の主要な点を示そうと努めたとき、…」  
十三年後にイェンゼンはこの個所について以下に示すような別の読みを提示した<sup>15</sup>。

「確かにホメロスは現実を観察した。だがそれが教育のためかどうかは疑わしいと思う。したがって、ホメロスが教育目的をもっていたのかどうか検討するつもりはない。しかし、(ホメロスに)よく似ていると我々がすでに述べた他の詩人たちも(教育的効果を)持っているに違いないと彼が言うとしても、私がそれ(似ているということ)によって理解するのは、他の詩人も(観客を)喜ばせようと努めるということなのである。しかし、以下にヘラクレイデスについて述べるところから示されるように、また、既に、彼らの理論の主要な点を提示しようと試みた際に述べたところから認められたように、彼らよりもヘラクレイデスの方がよりそうするのである。」

イェンゼンは当初、断片I～コラムIXで問題にされている論敵が、コラムXに登場するパロスのネオプトレモスであると考えていた。そこにはいくつかの根拠がある。まず、既に述べたように、ポルフェリオはホラティウスの『詩論』がネオプトレモスに依拠していると語っており、断片I～コラムIXまでの論敵の理論とホラティウスとの間には偶然とは思えない連関がある。第二に、コラムXでのネオプトレモスへの言及の仕方は、彼がすでに『詩論』の中に登場していることを示唆している。フィロデモスの場合、他の巻で既に言及した著者について触れる場合には、その巻名を付記する習慣があるから、ネオプトレモスへの言及は第五巻内部であると考えられる。したがって、断片I～コラムIXの相手はネオプトレモスである可能性が強いということになる。

さて、このネオプトレモスであるが、彼については殆ど何も分かっていない。イェンゼンは彼がアカデメイアに属していたと考え、その一つの根拠として、プラトンの直接の弟子であり、アカデメイアにいたことが分かっているポントスのヘラクレイデスの名前がここで現れることを挙げる。また、後に見るように(コラムXII)、ネオプトレモスの詩論において詩人の個人的才能が重視されている点も、アリストテレスよりはむしろプラトンに近い証拠であるとみなされる。

しかし、後にイェンゼンは、この個所で批判されているのがヘラクレイデスその人であると考え

るようになる。彼の新しい校訂はその判断に基づくものである。ヘラクレイデスは『詩学と詩人論』<sup>16</sup>を著しており、ここの論敵の議論はそこから採られたとの推測がなされる。この推測に従うと、この個所とホラティウスとの類似は、ヘラクレイデスとネオプトレモスの間に師弟関係を想定することによって解決されることになる。

他方、ロスターニは、イェンゼンの当初の考えを生かし、*P. Herc.* 1425 の前半が全体としてネオプトレモスの詩論を扱っているという立場を取りながら、ネオプトレモスをペリパトス派であると考えることによって、ホラティウスがペリパトス派の伝統に属しているという通説との調和を図っている。

われわれはペリパトス派、あるいはアカデメイアの詩論について、アリストテレスおよびプラトンの詩に対する言及から推測することができるだけであり、すでにフィンスラーも指摘する<sup>17</sup>通り、アリストテレスの『詩学』が詩に関するプラトンの議論に多くを負っている以上、両者の区別はかなり恣意的にならざるを得ない。しかしながら、ネオプトレモスの名前が明示されているコラム X 以下の部分がペリパトス派の文学理論の伝統への批判であることは、ネオプトレモス批判が、ペリパトス派のプラクシファネスへの批判と同一の文脈で登場していることから明らかだと思われる。また、詩人の個人的素質の重視も、イェンゼンの主張するようにアリストテレスの理論と矛盾するものではない。確かに『詩学』では詩作における *μανία* はおそらく退けられている (XVII1455a33) が、それは *φύσις* そのものの否定ではない。逆にここでは詩人が「優れた素質を持っている」べきだとされるのである。*φύσις* の問題が『詩学』において詳しく論じられていないのは、『詩学 (*περὶ ποιητικῆς* (sc. *τέχνης*))] という著作の性質によるものである。

ここに登場するヘラクレイデスについては、既にグリーンバーグが指摘するように<sup>18</sup>、この二つの読みの違いの大きさが、どちらをも信用することを不可能にしており、ヘラクレイデスが何らかの文脈で登場したことが認められるにしても、それが、理論家としてなのか、それとも作家としてなのかを含め、何ら確かなことは言えない。この論敵がヘラクレイデスであってプラトンの詩論の伝統に属しているのか、それともアリストテレスの影響のもとにある人物なのかは、徐々に考察してゆくことになるだろう。

#### 断片 II 23~32

「しかし、良い詩人の仕事は聴く者を楽しませ見る者に役立つことだと彼が記すとき、もし「役立つ」のが美德に向かわせるという意味なら、既に述べたところから明らかのように、徳によって楽しませることはできない。他方、もし… (断片末尾で二〜三行欠如)」

ここで、論敵が詩の目的についての古代の通説に従っていることがわかる。そこでは詩の目的は快と効用の両方に置かれていた。問題は両者の関係にある。プラトンは効用の観点に快を従属させたが、アリストテレスにおいては両者は独特な統一を示すことになる。『詩学』では、確かに詩の目的は「固有の快」にあるのだが、その「固有の快」は、「哀れみとおそれに基づき、模倣によってなされる快 (1453b11f.)」と説明され、模倣の快は一種の「学習」にあると主張されているからである。だがここでは、両者はともに満たすべき独立した二つの要求として理解されている。ホラティウスはまさに同じ立場に立っていた。

Aut prodesse volunt aut delectare poetae,

Aut simul et iucunda idonea dicere vitae. (vv. 333sq.)

しかし、「聴く者を楽しませ、見る者に役立つ」という言葉は、もしこの読みが正しいとすると<sup>19</sup>、詩の快が言葉の用法という形式的側面に存在し、効用は上演で見られる出来事に、つまり内容的側面にあるという意味だとも考えられる。そうすると、これは後に見る *ποίημα* と *ποίησις* の対立に対応する。つまり詩の快は *ποίημα* に、効用は *ποίησις* に依存することになる。これは、詩の快を

感情効果に求める古典古代の通念とは一線を画する考えであるが、アリストテレスが韻律のことを *ῥυθμιένος λόγος* と呼んだとき、詩の快についての後代のこうした考え方が先取りされていると考えることができるだろう。

それに対し、フィロデモスは論敵が詩の効用にかんして明確に規定していないことを批判する。詩の効用として普通考えられるのは道徳的效果と教育的価値の二つだろうが、第一についてフィロデモスは、道徳的效果は快と無関係であるという批判を展開する。詩における快と益とは、フィロデモスにとっては有機的に連関していなければならない。つまり、両者が相互にお互いを保証するようなものでなければならない。しかし、道徳的な有益は詩の快と何ら関係を持たないのである。このことは、フィロデモスが失われた断片末尾で想定していたと考えられるもう一つの効用、つまり教育的価値にも同様にあてはまる。

#### コラム I 1～31

「…それは不運な主張である。なぜなら、役立つことはたくさんあるのに、詩人に要求すべきなのがどのようなものであるのかを彼は規定しておらず、また、詩人が何によって、またどのようにして楽しませるのかも示しておらず、どちらの場合にせよ、詩人の美德は未規定のままに残されているからである。さらに、こうして彼は、きわめて有名な詩人の非常に美しい詩を何の役にも立たないとして拒絶するのだ。つまり、一部の詩人についてはほとんどの、他の詩人についてはすべての作品を、不完全だと拒絶するのである。われわれの関心からすると、有害な、それもきわめて有害な詩について語る必要はない。また、彼の説に従うなら、最も役立つ詩が最も良い詩だということになるのだが、それを受け入れるつもりもない。医学や哲学、あるいは他のどんな学問であれ、それが詩的表現によって樹立されたというだけでは、最高に有益にはならないからである。」

第二の効用として挙げられる教育的な価値についても、第一の効用と同じ批判が成り立つ上に、現実の詩に対応していないと言われる。まず、多くの優れた詩は、フィロデモスが既に断片 I で論じたように、教育的価値を持っていない。さらにここでは、教育的価値が詩において成立するにしても、それはその詩の詩としての価値とは無関係であり、また、教育的な内容の方も詩的に表現されることで何ら得るところがないとフィロデモスは主張する。

#### コラム I 31～II 11

「楽しませるが役に立たない人は詩才はあっても現実を知らないのだと述べるとき、彼はおそらく、現実の描写はすべて役立つと解釈しているように見えるが、これは明らかに誤りである。何の役にも立たない現実描写があるとしたら、現実を知っていて詩的に叙述するが、何ら役に立つわけではない詩人が存在することを妨げるものは何もないからである。」

しかしながら、詩は、直接の教訓を含んでいなくとも、現実を描写することによって教育的になりうると論敵は主張していた。したがってフィロデモスも、断片 II で批判された現実描写と教育的価値との関係を引き続きとりあげねばならない。論敵は詩の快を言語的・形式的側面にかかわるものだと規定していた。詩の才能はその側面に属している。他方、詩の効用は詩が何を描写するのか、つまり詩の内容に属している。したがって、詩の才能があっても現実の観察ができない詩人は教育的効用をもたらさないことになる。このような詩人は論敵の立場からすると優れた詩人ではない。

さて、フィロデモスはこれに対して、現実描写と教育的価値との関係は明瞭ではないと述べる。現実描写は何ら教育的価値を持たないかもしれないのである。

論敵は *τὰ πράγματα* という言葉で、作品の中で構成される「出来事」全般ではなく、その出来事が実際に起きた事実であるということを意味していた。それは後にコラム IV で、現実だけではなく「多くの虚偽 (*ψευδῶν*) や完全な作り話のようなことがら (*μυθωδεστάτων*)」も簡潔かつ明晰に

語りうると述べられ、現実が虚偽および作り話と対比されているところから明らかである。この対比が、たとえばセクストス・エンペイリコスによって知られる、弁論術理論から採られた「出来事」の三分割に対応していることは、多くの論者の指摘するところである。セクストスにおいては、実際に起きた事件の再現は *ἱστορία*、実際に生じたわけではないが生じ得たような事件の再現は *πλάσμα*、非現実的で偽なる表現は *μῦθος* と呼ばれている。例えば「首を切られたゴルゴンの頭からペガサスが飛び出したとか、ディオメデスの仲間が海豚に、オデュッセウスが馬に、ヘカベが犬に変身したとか」(adv. math. I 658B)の話が *μῦθος* になるわけである。この分割は他に『崇高論』(IX, 13)にも認められるものだが、具体的な作品の評価に関しては『崇高論』とこの論敵とのでは異なっている。『崇高論』では『オデュッセイア』は『イリアス』と比較して「作り話で信じ難い」と語られるが、ここでは二つの叙事詩がともに「現実」の観察の結果だと考えられているからである。いずれにせよ、フィロデモスの論敵の *πρᾶγμα*, *ψευδός*, *μῦθος* はセクストスの *ἱστορία*, *πλάσμα*, *μῦθος* にそれぞれ対応している。

このような言葉づかいはアリストテレス『詩学』の伝統とは一致しない。『詩学』においては *πρᾶγμα* は「物語 (*μῦθον*) は出来事の構成 (*σύνθεσιν τῶν πραγμάτων*) である (1450<sup>a</sup>4sq.)」という定義からも明らかなように、詩の中で描かれる出来事をその事実性とは無関係に意味しており、これは後にフィロデモスが引用する (IX, 32) ペリパトス派のプラクシファネスにおいても変わらない。しかし、この三分割の萌芽は既にアリストテレス『詩学』に存在しており、彼は悲劇が普遍を語るがゆえに歴史よりも哲学的であるという議論の中で次のように述べている。

「普遍とは、どのような人物にはどのような種類のことがらを語ったり行ったりするのが必然的ないし蓋然的なのかということであり、詩が登場人物に名前を与えるときに目指すのはそういうことである。…悲劇の場合人々は実際にあった名前に執着しているが、その原因は、可能なことは信じられることであるからだ。つまり、実際に起きなかったことが可能だとは信じられないが、不可能なことが実際に起きなかったのが明白である以上、起きたことについてはそれが可能だったのは明らかだからだ。(1451<sup>b</sup>9sq.)」

ここでは実際に起きたこと、事実ではないが可能なこと、不可能であり実際にも起きなかったことが区別されていて、アリストテレスは最初の二つを詩の素材として承認するが、第一の方が適切だと述べている。実際にあったことは、当然のことながら可能であり、多くの場合蓋然的でもあるからである。

したがって、このテキストがペリパトス派の伝統に属しないとこの用語法のずれから結論することはできない。この三分割はむしろアリストテレスの考えの一面の発展、その体系化だと考えることができるだろう。アリストテレスにとっては、出来事が必然的・蓋然的に展開することが重要だったのだが、実際に起こった事件の場合、蓋然的展開はいわば保証されており、その意味で、実際に生じなかった、つまり作家が作り出さねばならない出来事よりも有利な状況にあるからである。

#### コラム II 11～III 5

「また、評判の詩人に方言に関することがらの正確な学習などを課す必要もない。自分が書きおろす方言を知っていれば充分なのである。また、あらゆる慣習を学び、自然の知識を持つ必要もない。また詩人はすべての性格をしっかりと充たすべきだという主張を真面目にとってはならない。詩人は幾何学や地理学、占星術、法律、航海術を知るべきだと述べる時、彼は夢を見ているのである。地理学が必要だとすると、どうして、手作業を除くすべての学問が詩人にとってふさわしいものにならないのか。ただ、こうした事柄はむしろ他の人にふさわしく、とくに哲学者は人間についても、そうした手作業について知らねばならない……<sup>20)</sup>」

前項の内容から詩人に対して持ち出される直接の要求は、さまざまな学問的知識、たとえば言語学

の知識である。フィロデモスはこれが不必要であり、また不可能であることを指摘する。イエンゼンが指摘するように、アレグサンドリアの知識人たちは詩人に対して方言の正確な知識を要求した<sup>21</sup>。ホラティウスはそこまでは行かない。彼はしかし、詩人が登場人物の性格をきちんと把握すべきであること、そして、そのためにはソクラテス派の書物が有益であることを指摘した<sup>22</sup>。これもまた、この個所での論敵の主張と一致するものである。

コラムⅢの六～十一行は損傷が激しくて読むことができない。

## 2 詩作, 詩, 詩人

### コラム Ⅲ 12～31

「だが、第一の、そして最少のものはすぐれた準備に関しては簡潔と明晰であるが、詩に関しては明晰と簡潔であると、また両者とも技術と詩人とに属しているという主張について、彼にとって第一とは何を意味し、最少とは何を意味するのかを問わねばならない。「第一」が準備に属しているのなら、これがより早いというのは愚かである。準備はすでに多くのほかのものからも成り立っているからである。そして、なぜ彼が簡潔さと見通しの良さがもっとも少ないと言うのか<sup>23</sup>驚いてしまう。しかし……」(コラム末尾三行欠如)

ここで論敵は、詩の教育的効用から、すぐれた詩作の持つべき長所に話題を移す。そして、準備(προνοούμενον)に関しては簡潔(συντομία)と明晰(ἐναργεία)が、詩(ποίημα)においては明晰と簡潔が第一の、かつ最少の条件であると語る。この個所はかなり難解である。「準備」とは何か、「詩」はここで何を意味し、両者の長所とされる簡潔と明晰は何を意味しているのか。準備に関しては「簡潔と明晰」と語られ、詩に関しては「明晰と簡潔」と順序が逆になっていることに何か意味があるのか。また、これはフィロデモス自身が問いかけていることだが、「第一」「最少」はそれぞれどういう意味なのかも問われねばならない。

「準備」「詩」の概念については比較的是っきりしている。多くの評者が指摘するように、フィロデモスの論敵はここで詩学を、詩(ποίημα)、詩作(ποίησις)、詩人(ποιητής)<sup>24</sup>に分割する理論に従っている。これはフィロデモス『詩論』五巻においては、ネオプトレモス説として後に(コラムⅪ～Ⅻ)批判されることになる理論である。

ネオプトレモスにおいては、これら三要素は次のように定義されている。「詩作に属するのは内容(ὑπόθεσις)である。」「詩に関与するのは語法の構成(σύνθεσις τῆς λέξεως)であり、思想(διανοία)や構造(τάξις)、行動、性格創造は無関係である」詩人とは「詩的な技術と能力を持つ人」であり、それは「詩および詩作とともに『詩学』の一領域(εἶδος τῆς τέχνης)」であると。彼は詩(ποίημα)を、アリストテレスにおいては悲劇の第四の構成要素である語法(λέξις)に関連させ、詩作(ποίησις)を、最初の三つの構成要素、「物語」「性格」「思想」に関連させていることになる。これらは近代美学の「形式」及び「内容」の概念にほぼ等価である。

この理論のより詳細な説明、およびそれへのフィロデモスの批判については後に回さねばならないが、我々の未知の論敵がネオプトレモスと同じ理論的基盤に立っているならば、詩と詩作は、さきほど述べたように、それぞれ作品の快と益にも対応していることになるだろう。

さて、ここでは詩が準備と対比させられている。そうすると、この論敵における「準備」はネオプトレモスの「詩作」に対応する概念だと考えられる。その場合、作品の内容的側面は、詩そのものの(αὐτὸ τὸ ποιεῖν)に先立つ準備段階として理解されていることになる。詩を生み出すプロセスは、まず内容に関して構想を練り(準備段階)、それからその内容に具体的言語表現を与えるという

二段階のプロセスとして捉えられる。こうした論敵の理論は、アリストテレス『詩学』十七章に対応する。そこでは、悲劇詩人は、まずあらかじめ「一般的筋書」を作り、そののち、それを「挿話（ἐπεισοδίου）」で肉づけして行くように求められている。確かに、この「挿話」を詩（ποίημα）と同一視することは難しいかもしれない<sup>25</sup>が、しかし、内容的契機が具体的な言語表現に先行する要素だと考えられている点では両者は同じである。ホラティウスの *verbaque provisam rem non invita sequentur* (A.P. 311) もまた同じ伝統に属する。

詩と準備とのこの対比は、また、語法に属する事柄が、教育の領域ではなく天分の領域にあることをも示唆している。語法に関しては準備、すなわち教授が成立しないからである。そうすると、詩は詩人の天分に属し、詩作は教授可能な技術の領域に属することになる。その場合、次の図式が成立することになる。

詩＝語法＝快＝形式＝才能

詩作＝物語＋性格＋思想＝益＝内容＝技術

したがって、ネオプトレモスによる、「詩的な技術と才能を持つ人」という詩人の定義の二つの構成要素は、それぞれ、詩作と詩とに対応していることになる。「技術的準備は、確かに詩人に内容と主題をどのように選択するかの認識をもたらさう。…逆に、自然は詩人に言葉と韻律の使い方を教えるのである<sup>26</sup>。」さらに、『詩学』の第三の領域である詩人論にも、快か益かという詩人の目的についての議論とともに、今度は個々の詩人の観点から、再び詩と詩作の両方の記述が含まれることになる。「内容と〔言葉の〕構成は詩人にも属する」（コラムⅧ）のである。

そうすると、『詩学』はネオプトレモスのこの構想のもとでは次のように分割されることになる。

#### I （狭義の）詩学（περὶ τῆς τέχνης ποιητικῆς）

##### (1) 詩作について（περὶ τῆς ποιήσεως）

内容論。筋、性格、思想をどう作るべきか。

##### (2) 詩について（περὶ τοῦ ποιήματος）

形式論。語法をどう構成すべきか。詩のジャンル。

#### II 詩人論（περὶ τῶν ποιητῶν）

##### (1) 内容について

##### (2) 語法について

##### (3) 詩人の目的（語法に由来する快と内容に由来する益）

イエンゼンは、ホラティウスの『詩論』がまさにこの構成を持っていることを指摘した<sup>27</sup>。そこでは、まず *res* 一般（1～44）、次いで *facundia* と詩のジャンル（45～294）、最後に詩人（295～476）が論じられ、詩人の議論においてもまた内容と語法の問題が取り上げられることになる。『詩論』に見られる多くの繰り返しはしたがってこの観点の違いによって説明できることになる<sup>28</sup>。

フィロデモスのこの個所での「準備」が「詩作」であるなら、論敵が「準備に関しては簡潔と明晰が」第一かつ最少であり、「詩にかんしては明晰と簡潔が」そうだと語っているのは、比較的容易に理解できることになるだろう。イエンゼンは、明晰と簡潔という二つの概念のこの反復は、詩作においては簡潔が第一で明晰が最少の要求であったのに対して、詩においては両者の関係が逆転しているためだと考えたが<sup>29</sup>、これは単なる語順に過度の重要性を与えている。むしろ、この反復は、論敵の本来の議論では詩作と詩の二つの議論において別々に現れた表現を、フィロデモスが一箇所にまとめた結果だと考えられるだろう。彼はオリジナルの語順を尊重したのだが、その語順に特に意味があったとは思われない。

むしろ、これらの概念が詩と詩作において異なった意味で用いられていることの方が重要だと考えられる。詩作において簡潔が生じるのは、「エウリピデスのようにプロロゴスですっと前に冒頭で

語るのでも、あるいは事件が済んでからいろいろと話す人のように長々と語るのでもない場合」(Anonymus Seguerianus 65)であり、この規定はアリストテレス『詩学』の物語の大きさの議論に対応するものである。アリストテレスによると、悲劇の物語は大きいほど美しくなるが、それは、「全体が一目で見渡せる」、つまり明晰が失われない限りにおいてである。したがって大きさには明晰の観点からの制約が課されるのである。悲劇の場合、「主人公が不幸から幸福へ、あるいはその反対に変化するのにふさわしい長さ」が大きさの限界として設定されるのだが、明晰が保たれる限り簡潔もまた成立することになるだろう。つまり両者は相互に依存している。要するに、これら二つの要請は、詩人に物語を「卵から始めない」ように求めているのである。

他方、詩においては簡潔と明晰はより緊張した関係にある。簡潔は言葉を覚えて貰うための手段(Anaximenes, *Rhet.* 30, 8)だが、brevis esse laboro obscurus fio (A.P. 25sq.) とホラティウスが語るように、過度になると明晰を損なうことになる。ここで重要なのは「取り去ると話が不明瞭になるものだけを残し、残りを取り除く(Anaximenes, *ibid.*)」ことである。

さて、これらが第一かつ最少の要求であるというネオプトレモスの議論に対しフィロデモスは、第一と最少という二つの形容詞の意味を問うことから批判を始める。「第一」という形容詞は「最良」の意味でも時間的先行の意味でも用いられうる。フィロデモスはどちらの意味にとっても論敵の主張が間違っていることを示そうとする。詩の準備は多くの要素からなりたっており、その中で最初が「簡潔」であるということは意味をなさない。だが、「第一」が「最良」の意味だとするとどうだろうか。三行の空白の後、フィロデモスはこの解釈を攻撃する。

#### コラムⅣ 1～25

しかし、もし「第一」が「最良」の意味なら、どうしてそれが「最少」になるのか。また、どうして明晰と簡潔が、詩作の他の属性よりも優れていることになるのか。簡潔で明晰に描写されるものこそが現実だということになるのはいかなる必然によるのだろうか。多くの虚偽だけでなく、完全に作り話のようなことがらもまた詩人によって明晰に描写されるのに。これら二つが詩作の技術と詩人とに属することが、どうして問題にするに値するのか。簡潔と明晰は詩に固有なものではなく、[優れた] 散文作家をも生み出すものだし<sup>30</sup>、また、技術によって詩人から作り出されるのはこれら二つだけではなく、およそ優れた長所はすべてそうなのだから。

「第一」が「最良」の意味なら、それは詩に対する最小限の要求ではなくなる。したがって「最少」というもう一つの形容詞とは一致しないことになる。さらにフィロデモスはそもそも簡潔と明晰という二つの要請が詩にとってとくに重要な要求であることを否定する。フィロデモスの論駁は次の二点である。第一に、論敵の議論においては、優れた詩は「現実」を描写することによって教育的効果を与えねばならない。しかしこれは詩の明晰さとは何の関係もないのである。*ἱστορία* だけでなく、*πλάσμα* もまた *μῦθος* も明晰に作りだすことができるからである。明晰と簡潔が優れた詩の長所であることに疑いはないとしても、それらはそれだけで詩の教育的効果を保証するものではない。詩には他の長所も求められるのであり、明晰と簡潔は多くの長所の一つにすぎない。したがって「第一」とは言えないのである。第二に、それらは詩に固有の長所でもない。散文もまた明晰かつ簡潔に構成されるべきだからである。ここでフィロデモスは古代ギリシアの伝統的な詩観に従って、「詩」を「散文」と対置する。詩の「第一の」長所なるものが存在するとしたら、それは散文にも同様にあてはまるのではなく、詩に固有の長所でなければならない。だが彼のこの考えは、韻律を詩にとって本質的ではないとみなすアリストテレス<sup>31</sup>とは真っ向から対立するものである。そしてこのこともまた、論敵がアリストテレス的伝統に属していることを示唆するように思われる。

結局フィロデモスは簡潔と明晰が詩の「第一」かつ「最少」の要求であるという論敵の議論に一貫した意味を認めることができずに終わっている。フィロデモスの反駁にはあるいは誤解があるか



も知れない。われわれはここではこの二つの長所が優れた詩の本質的な特徴であるという主張しか確認できず、「第一」と「最少」の本来の文脈における意味がフィロデモスの言うように矛盾しているのかどうかはわからない。しかし反駁の大きな道筋は一貫性を持っているように思われる。フィロデモスはここで、「明晰」や「簡潔」といった、かなり一般的にあてはまるような特徴が詩の固有の長所になるという発想そのものに反対しているのである。それは結局は、詩を内容と形式とに分けてそれぞれについて相互に独立した要求をなしうろという論敵の『詩学』の基本的な図式そのもののへの反対に至るだろう。この意味で、フィロデモスに二十世紀の直観主義的美学の先駆けを見るロスターニの議論<sup>31</sup>には一定の正当性がある。この立場が明確に打ち出されるのは、ネオプトレモス説への批判においてである。だが、われわれはその前に、この未知の論敵への残された反駁をたどって行かねばならない。

### 註

- (1) Cf. Greenberg (1955) 1. フィロデモスの図書館の実態に関しては cf. Gigante (1987), 31sqq.
- (2) 『詩学』第二巻については cf. Janko (1984).
- (3) Porphyrio 『詩論』注釈, in quem librum congegessit praecepta Neoptolemi τοῦ Παριανοῦ de arte poetica, non quidem omnia, sed eminentissima.
- (4) フィロデモス『詩論』とアリストテレス『詩人論』の関係については cf. Janko (1991). ジャンコは、『詩論』四巻末尾をなす *P. Herc.* 207 がアリストテレス『詩人論』の直接の引用を含むその批判であると考え。また、アリストテレスのカタルシス論との関係については cf. Gomperz (1909), Nardelli (1978), および Janko (1991) 59 sqq.。ここでは、『詩論』第五巻の冒頭部分である *P. Herc.* 1581 に、アリストテレス『詩人論』でのカタルシス説に対する批判がなされているとされる。
- (5) Cf. Jensen (1936), 305.
- (6) *P. Herc.* 207, 228, 403, 407, 444, 460, 466, 994, 1073, 1074, 1081, 1087, 1425, 1538, 1581, 1676, 1677.
- (7) Cf. Rostagni (1955), 399.
- (8) Rostagni (1955), Greenberg (1955). 特にロスターニは、内容と形式の分離を否定するフィロデモスに、彼と同時代のクローチェの直観主義美学的先駆者を認める点でユニークである。
- (9) Jensen (1923) は、左ページにこれら二つの写し (Hayter によるオックスフォード写本 [O] と Casanova によるナポリ写本 [N]) を、右ページにイェンゼンによる校訂および翻訳を掲載しており、写本とテキストの関係を検討するのに便利である。
- (10) 以下、基本的にテキストは Jensen (1923) の読みに従う。そこから離れる場合は注記する。
- (11) 『詩学』4 および 9 章。
- (12) 『国家』第二～三巻。
- (13) ただし, Philippson (1924) は 16～20 行の再構成を試み、そこでは、詩人は明確に倫理的、教育的結論を表現するわけではなく、読者に推測の余地を残しておくことと論じられていたとする。
- (14) この箇所を読みは Rostagni (1955) 424sq. に従う。
- (15) Jensen (1936) 295 sq.
- (16) DL.V 88.
- (17) Cf. Finsler (1900).
- (18) Cf. Greenberg (1955) 18.
- (19) Jensen (1936) 296 は, Philippson (1924) 418 に従い, ὀρῶντας を φρονούοντας に変更する。当初の読みでは空白を埋めるに十分な長さにはならないからである。元来、この箇所に残っているのは冒頭のオミクロン一つであり、次の εἰ まで八字以上の空白がある。それゆえ、当初の読みを維持するためには後に何らかの補足を加えねばならない。他方、「聞くものを楽しませ、思慮あるものには役立つ」は文脈上必要な対比を構成していない。Greenberg (1955) 18 はこの読みを採用するが、Rostagni (1955) 423 はこの理由からイェンゼンの最初の読みを擁護する。そしてコラム I 32sqq. 「楽しませるが



- 役に立たない人は才能はあっても現実を知らない」をその根拠にする。我々もまた、ここで詩の快と益とが、*ποίημα* と *ποίησις* にそれぞれ割り当てられているというロスターニの解釈を支持する。
- (20) テキストは Zucker (1926-7) 242 に従う。
- (21) Cf. Jensen (1923) 113.
- (22) A.P. 309 sqq. Scribendi recte sapere est et principium et fons.  
rem tibi Socraticae poterunt ostendere chartae.  
..... ille profecto  
reddere personae scit convenientia cuique.
- (23) テキストは Zucker (1926-7) 243 sq. に従う。
- (24) Nickau (1966) はアリストテレス『詩学』における *ἐπεισοδιῶν* を、「一般的な形で提示された筋書に適合するように素材を選んで具体的に構成すること」(161) であると述べ、*λόγος καθολοῦ* から具体的な作品を作り出すプロセス全体を *ἐπεισοδιῶν* だとみなしているが、この解釈においては、*ἐπεισοδιῶν* はほぼ我々の論敵の *ποίημα* に等しい。
- (25) ここでは *ποίημα* = 詩、*ποίησις* = 詩作という慣習的な訳語を用いるが、以下の議論から明らかなように、両者の相違は作品と創作のものではない。むしろ、作品と創作行為それぞれの形式的要素と内容的要素の対比が問題になっている。
- (26) Rostagni (1955) 418.
- (27) Jensen (1923) 121 sqq. 但し、イエンゼンの分析はより詳細にわたっており、その際彼はホラティウス『詩論』の構成が全体としてネオプトレモスに由来するという前提に立っているが、ネオプトレモスをホラティウスから再構成するにはより慎重であるべきだと我々は考える。
- (28) 例えば vv. 40 sqq. と 310 sqq. は題材の選びかたについて、vv. 86 sqq. と 315 sqq. はともに文体と性格の一致について、簡潔と明晰については vv. 25 sq. と 335 sqq. で、それぞれ *ars* と *artifex* の観点から論じられている。
- (29) Cf. Jensen (1923) 116. イエンゼンの当初のテキストはこの解釈に基づいている。「簡潔が最少で明晰が第一であると彼が述べるのはどうしても驚いてしまう… (コラム III 28-31)」。つぎのコラムの「明晰と簡潔が、詩作の他の属性よりもすぐれている」はイエンゼンの解釈を不可能にする。Cf. Zucker (1926-7) 243.
- (30) テキストは Mangoni (1992) 28 に従う。
- (31) Cf. Rostagni (1955) 396, 435.

## 文 献

- Finsler, G., *Platon und die aristotelische Poetik*, (Leipzig 1900).
- Gigante, M., *La Bibliothéque de Philodème et L'épicurisme Romain*, (Paris 1987).
- Gomperz, Th., "Philodem und die aristotelische Poetik", in *Wiener Eranos zur fünfzigsten Versammlung deutscher Philologen und Schulmänner in Graz*, (Graz 1909).
- Greenberg, Nathan A., *The Poetic Theory of Philodemus*, (Diss. Harvard 1955)
- Janko, R., *Aristotle on Comedy*, (London 1984).
- Janko, R., "Philodemus' *On Poems* and Aristotele's *On Poets*", *Cronache Ercolanesi* 21, (1991).
- Jensen, C., *Philodemus über die Gedichte, fünftes Buch*, (Berlin 1923).
- Jensen, C., "Herakleides von Pontos bei Philodem und Horaz", *Sitzungsberichte der preussischen Akademie der Wissenschaft*, (1936).
- Mangoni, C., "Prosa e poesia nel V libro della *Poetica* di Filodemo", *Cronache Ercolanesi* 22, (1992).
- Nardelli, M.L., "La catarsi poetica nel PHerc. 1581", *Cronache Ercolanesi* 8, (1978).
- Philippson, Jensen (1923) への書評. *Philologische Wochenschrift*, (1924).
- Rostagni, A., "Philodemo contro l'estetica classica", in A. Rostagni, *Scritti minori I: Aesthetica*, (Torino 1955).
- Zucker, F., "Zur Textherstellung und Erklärung von Philodems V. Buch *περὶ ποιημάτων*",

*Philologus* 82, (1926).